

目次

はじめに……………11

I 『源氏物語』を読み解く……………13

第一章 方法としての袍の色——『源氏物語』正編の束帯姿……………15

一 はじめに……………15

二 「四位五位こきませに」考——若紫巻の袍の色……………18

三 方法化される当色(一)——滌標巻の住吉参詣……………21

四 方法化される当色(二)——少女巻の夕霧と光源氏……………23

五 「黒」の袍と柏木——若菜下巻の住吉参詣の場面から……………27

六 おわりに……………32

第二章 紫の上と少納言の乳母、そして女房たち——「存在」と「不在」の意義——

- 一 はじめに……………37
- 二 少納言の乳母(一)——登場から二条院へ移るまで……………37
- 三 少納言の乳母(二)——二条院で……………42
- 四 少納言の乳母の不在、そして代わる女房たち……………45
- 五 子を産まない紫の上——むすびにかえて……………47

第三章 「古い」の物語創造へ——光源氏は「ねびまさら」ないのか——

- 一 はじめに……………51
- 二 『源氏物語』第一部の「ねび」表現……………53
- 三 「ねび」表現に見る光源氏……………55
- 四 「異常不老譚」の矛盾……………60
- 五 むすびにかえて……………63

第四章 「親めく」光源氏——夕霧への対応についての〈語り〉——

- 一 はじめに……………69
- 二 「親めく」について……………71
- 三 「親がる」および「親がりありく」「親がりはつ」について……………75
- 四 「親ごま」について……………78
- 五 夕霧と「親めく」光源氏——むすびにかえて……………81

第五章 玉鬘裳着の日の歌——『源氏物語』における儀礼歌の問題——

- 一 はじめに——問題の所在……………85
- 二 玉鬘の裳着の意義——先行研究から……………87
- 三 裳着当日の展開(一)——儀式を前に……………88
- 四 裳着当日の展開(二)——儀式開始後……………92
- 五 大宮の贈物——「櫛の箱」の問題……………95
- 六 大宮の文、そして歌——「玉くしげ」の歌の問題……………97
- 七 『源氏物語』の儀礼の歌——むすびにかえて……………101

第六章 橋姫巻の姉妹の楽器をめぐる解釈史が提起するもの

- 『文学・語学』編集長の経験と古典文学研究の立場から……………107

一	はじめに	107
二	編集長の経験から	107
三	橋姫巻の一場面の解釈をめぐって	111
四	楽器交換の問題	115
五	おわりに	118

第七章 女房たちの贈歌——暴かれる薫—— 125

一	はじめに	125
二	召人たちの歌	126
三	女房たちと薫(一)	128
四	女房たちと薫(二)	130
五	むすびにかえて	134

第八章 薫がまとうもの——表現から読み解く宇治十帖—— 137

一	はじめに	137
二	『源氏物語』正編における光源氏の衣装	138

三	薫の衣装をめぐる「ずれ」、あるいは違和感	139
四	「脱ぐ」薫、「着替える」薫	145
五	おわりに	148

II 『紫式部日記』と『源氏物語』前後の物語を読み解く 153

第九章 『紫式部日記』の酒宴 155

一	はじめに	155
二	『紫式部日記』の「儀式」	155
三	土御門邸行幸の日の酒宴	157
四	敦成親王「御五十日」の酒宴(一)	159
五	敦成親王「御五十日」の酒宴(二)	162
六	中宮の臨時客の酒宴	164
七	むすびにかえて	165

第十章 女房たちを書きとどめる『紫式部日記』——「女房名」の政治性を超えて……169

- 一 はじめに……………169
- 二 『紫式部日記』に登場する女房たち……………170
- 三 「命名」をめぐる問題……………173
- 四 「女房名」の政治性……………174
- 五 女房たちを表現すること……………177
- 六 おわりに……………180

附節 『紫式部日記』が書かなかったこと——中宮彰子を予祝するために……………185

第十一章 『うつほ物語』の宮の君の問題……………193

- 一 はじめに……………193
- 二 女一の宮の懐妊をめぐる……………195
- 三 難産と禁忌侵犯の可能性……………197
- 四 仲忠と小君／兼雅と宮の君……………201
- 五 むすびにかえて……………205

第十二章 『山路の露』小考——『源氏物語』の「最終巻」として……………209

- 一 はじめに……………209
- 二 講義資料提示型遠隔授業についての記録的な報告……………210
- 三 『山路の露』の評価をめぐる……………211
- 四 『山路の露』が目指していたこと——浮舟に関わる諸問題……………214
- 五 『山路の露』における浮舟以外の女性たち——むすびにかえて……………219

第十三章 時代を映す『源氏物語』

——「源氏物語千年紀」における現代作家の享受の様相から……………225

- 一 はじめに……………225
- 二 個性を映す『源氏物語』……………226
- 三 少女の欲望——角田光代「若紫」……………229
- 四 女たちの本音と欲望——桐野夏生「柏木」・小池昌代「浮舟」……………235
- 五 むすびにかえて……………239

### Ⅲ 古典文学教育を考える

#### 第十四章 国語教育を超えて

- 一 はじめに……………247
- 二 教科書の中の古典教材……………248
- 三 古典教材が定番化かつ固定化する背景……………250
- 四 「国語教育」を超えて……………253
- 五 おわりに……………255

#### 第十五章 これからの文学教育

- 一 はじめに……………257
- 二 新学習指導要領をめぐって(一)——「論理的」な国語力?……………259
- 三 新学習指導要領をめぐって(二)——「実用的」な国語力?……………261
- 四 「役に立つ／役に立たない」からの脱却……………263
- 五 教科書の中の古典文学……………265

- 六 おわりに……………270

#### 第十六章 古典の魅力を発見させること——研究は教育に活かせるか

- 一 はじめに……………275
- 二 テキストへの取り組み方——「連続性」という視点……………276
- 三 教材としての『源氏物語』若紫巻の一場面——「出典探し」の試み……………280
- 四 「垣間見」再考——むすびにかえて……………286

#### 附節

- 女君たちのテーマ・ソング——『源氏物語』の楽しみ方……………293

#### 初出一覧

#### あとがき

#### 人名索引

初出一覧……………	299
あとがき……………	301
人名索引……………	001

⑤

『源氏物語』の引用本文は、特にことわらない限り、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館、一九九四～一九九八年）により、括弧内に『源氏物語』の巻名、新編日本古典文学全集本の巻数・頁数を記した。『紫式部日記』の引用本文は、中野幸一校注・訳、新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館、一九九四年）所収『紫式部日記』によっている。それ以外の作品等の引用本文は、各章中に記載した。傍点、傍線等は筆者が施した。

## はじめに

本書は、前著『読む源氏物語 読まれる源氏物語』（森話社、二〇〇八年）刊行後、諸誌において活字化してきた主な論考をまとめた一書である。「Ⅰ 『源氏物語』を読み解く」、「Ⅱ 『紫式部日記』と『源氏物語』前後の物語を読み解く」、「Ⅲ 古典文学教育を考える」の三部構成からなるが、ⅠとⅡについては、表現への注目から『源氏物語』、『紫式部日記』、その他のテクストを丁寧に読み解くことを試みた論考群であり、このアプローチは前著の方法を引き継ぐものである。また、Ⅱには前著においても注目した『源氏物語』享受に関わる論考も収めている。Ⅲは、やはり前著でも論及した高校国語教科書をめぐる問題、また時々刻々と変わりゆく国語教育をめぐる課題、中でも古典文学教育の諸問題について考察した論考とともに、古典文学研究を教育に活かす方法を探る具体的な試みを述べた論考等を収めた。Ⅲの国語教育に関わる論考は、本書をまとめる二〇二五年十二月現在ではすでに「現行」となって実施されている「学習指導要領」が、「新学習指導要領」として施行されることとなった折に論じた問題提起的な論考も含まれているが、その時点でどのような問題があったかということを変更して確認し、今後の国語教育のさらなる方向を探っていくきっかけになればと考え、ほぼそのまま収めることとした。

こうして一書としてまとめてみると、あまりにも遅々とした歩みで進めてきたことが改めて思い知らされ、汗顔の至りである。それでも、長年の間、私が常に大切にしてきたものとして、『源氏物語』をはじめとした古典文学の豊かな魅力をより深く掘り下げたいという思い、そして一方で研究のための研究であってはならないという思いがあり、

そうした意識がこの文字どおりの拙著を支えていることにささやかな自負がある。日々激しく変わりゆくこの現代において、古典文学研究を研究の枠組みの内に閉じ込めることなく、教育そして社会とよりいっそう関わらせていく必要があることを痛感している。本書が、IとIIの論考群とともにIIIの論考群を収めているのはそうした問題意識によったものである。一書としてのご批評を賜れば幸いである。

# I 『源氏物語』を読み解く